太宰府人物志

資料室だより ㊿

小野隆助の学校設立策

小野隆助は、明治23年（1890年）の議会開設以降3度にわたり衆議院議員に選ばれた太宰府出身の政治家です。太宰府天満宮の社家に生まれ、勤王家真木和泉を伯父に持つ彼は、戊辰戦争の際に福岡藩の就義隊を率いて名を挙げ、維新後は筑前竹槍一揆（明治6年）、佐賀の乱（同7年）、西南戦争（同10年）で鎮撫側として奔走します。その後御笠・那珂・席田郡郡長や御笠中学校校長を務める傍ら、筑前地方の自由民権運動に深く関わり、第1回衆議院議員選挙の出馬に至ります。太宰府天満宮の1千年祭（明治35年）では彼が中心となり、文書館建設、神苑拡張、馬車鉄道敷設など数々の事業が実現しました。

ところで、小野隆助が旧福岡県庁に出仕していた頃、三木隆介の名で学校建設について興味深い意見を提出しています（『福岡県教育百年史』第1巻所収）。明治5年、新政府はいわゆる「学制」を公布し、新しい教育制度の設立を計画します。地方では小学校の設置が急がれ、旧福岡県では告諭書を発し、県内各地区に学校設置の準備を促しました。県の計画は、募金により先ず管内に30校余りを開校し、漸次定数に近付けていく（630校余り）というものでした。これに対し小野は「県は初めに定数の学校設立を令すべき」と異議を唱えます。彼は、学校の設置、特に金銭面についてを「民」の力により進めるべきだと考えており、県の役割は設置校数や必要経費・人員・教材等や備品の詳細を確実に示すことで、集金や費用の管理に県が直接関わることをよしとしませんでした。彼のねらいは次の2点にあったと言うことができます。まず、各区域の人民に学校の設置について協議を尽くさせること。次に、周辺区域と比べることで区域間に競争心が湧くこと。どうやら小野は、まず「自分たちの力で建てた自分たちの学校」という意識が盛り上がることで愛着心が育ち、それが各地域の学校の発展につながっていく、と考えていたようです。また募金方法についても県の計画の甘さを指摘しています。彼は、最初の30校建設に拠金した者に再度の出資を望むことは難しく、「漸次建校」策は行き詰まるのでは、という懸念を持っていました。

私たちはこの意見に、小野隆助の思想の一端を垣間見ることができたのではないでしょうか。彼が求めたのは、「民」を主役とした制度の設立と、計算に基づく確実な計画の遂行でした。これは、後の彼の功績を考えるうえで、一つのポイントとなっていくかもしれません。

市史資料室　藤田理子